



大津町のホームページは子育て情報がいっぱい!



大津町のホームページは見たことがありますか?子育てに関する情報がたくさん載っています。まずはアクセスしてみてくださいね!

<http://www.town.ozu.kumamoto.jp/>

パソコンを持っていない人は、携帯電話用のページもありますよ。



★子育てイベントカレンダー



子育てのページではアクセス数 No.1!
1カ月ごとのサークルや支援センターのイベントが載っています。
「子どもと一緒にどこかへ遊びに行きたいなあ」と思ったらおススメ。

★保育園・幼稚園・学校について

大津幼稚園のページが新しくできました。各園、学校の紹介だけでなく、入園の申込方法や料金についても詳しく載っています。
「今日の給食」のページもあります。
小学生はこんなおいしいようなものを毎日食べているんだね。

★キッズページ

子ども向けのページですが、大人も楽しめます。「大津町って?」や「大津町が100人の町だったら」など見どころたくさんです。「社会科見学」では大津元気くんが大津町を元気に紹介しています。
元気君は給食のレシピも紹介しています。今晚のおかずにも迷ったらどうぞ!



★その他子育て支援情報など

健診の日程などが載っている「すくすくカレンダー」や、子育ての相談窓口も載っています。



これからも
皆さんに愛される
広報紙を目指して

第53回熊本県広報コンクール グランプリ受賞

3年連続で

町の人が評価されました

第53回熊本県広報コンクールで、広報おおづが町村部で特選に選ばれ、さらに特選の中から選ばれる「熊日賞」に選ばれました。広報おおづは、昨年引き続き3年連続で熊日賞を受賞しました。

大津町に住んでいる皆さんがいたから受賞することができました。取材を快く引き受けてくれた人、こぼれそうな笑顔を写真に撮らせてくれた人、何よりも皆さんがこの町で頑張っていたから広報おおづの紙面は充実したのだと思います。

表紙に込めた思い

広報おおづの表紙には「大津のことがもっと好きになる情報誌」と書いています。これは、皆さんに町のこともっと好きになってほしいとの思いを込めて発行しています。

大津に住むあなたにもっと大津を好きになってほしいから「広報おおづ」は大津に住んでいる皆さんに向けたラブレターにしました。

大津町には、まだまだわたしたちが知らない魅力があるはずですよ。

今後より多くの「まちの魅力」を伝えるために広報おおづは町で頑張る皆さんを紹介していきたいと思っています。



広報おおづのロゴの上には、平成21年5月号から「大津のことがもっと好きになる情報誌」の文字を入れています。これからも大津の愛を届けていきます。

審査委員の皆さんから講評をいただきました



グラフィックデザイナー
松本 良介さん

連続のトップご受賞おめでとうございます。ここ数年の各広報紙のレベルアップは目を見張るものがありますが、中でも特に「広報おおづ」はデザイン・レイアウトの面でも美しく、また機能的にも最高に読みやすい紙面です。書体の選択、カラーの配りも上品なセンスがうかがえますし、ホワイトスペース(間の取り方)の配置も心憎い技術で、とても好感のもてる仕上がります。毎号の企画特集ページの視覚化もダイナミックですし、写真の使い方も巧みで効果的です。

大津町の元気な活力を表して、皆さんに素敵な広報紙を届けておられます。担当者とサポートされている作業の方達の力量に敬意を表し、ますますレベルの高い紙面作りを期待いたします。



歌人・作家
本田 節子さん

連続しての「熊日賞」ご受賞おめでとうございます。「市町村の文化度を測る目安の一つが広報紙」だと私は思っています。

歴史的なものも残しながら近代的工場地帯も併せ持つ大津。「広報おおづ」はそれらを背景に、住民の方々に誇りを伝えている広報紙として、住民の立場に立つての編集に好感が持てました。

誌面に活力があるのは、汗流して取材に歩かれた結果が随所に表れているからです。郷土の豊かさや担当者の情熱あってこそその連続ご受賞です。菊池郡市の共同特集という初めての試みにも敬意を表します。しかもこの特集とは別に、大津の梅、大津ならではのHonda熊本硬式野球部、「からいも」などと独自の特集も組まれていて惹かれました。



熊本大学 名誉教授
丸山 定巳さん

県広報コンクールのグランプリ受賞おめでとうございます。

審査員全員の一致した評価でした。

全体としてこのところ意欲的な企画が少なくなっています。そうした中で、審査の対象となった3カ月分だけでも、「広報おおづ」の取り組みは際立っていました。伝統芸術「大津梅」の歴史や現況を多面的に取り上げた特集、Honda熊本硬式野球部と大津の夏をテーマにした企画、特産の「からいも」をまちおこしと結びつけた多角的な展開、それにペットと人間の有り様を描いた特別企画と、いずれも住民の誇りと地域アイデンティティを育むものとなっていました。